

カナダ, メキシコ, キューバ, グアテマラにおけるリュミエール映画の受容 —シネマトグラフの世界的浸透〈その4〉—

永治 日出雄

Hideo NAGAYA

(ヨーロッパ文化選修)

I カナダにおけるリュミエール映画の受容

大航海時代以前のカナダでは太平洋岸からニュー・ファンランドに至る大陸に、人口22万足らずの原住民が暮っていた。これらカナダ・インディアンの中で、セント・ローレンス河流域のアルゴンキン族はカヌーを駆使して狩猟を続け、オンタリオ湖周辺のイロクォワ族はすでに農耕と製陶に従事した。1534年フランスの船長ジャック・カルティエはフランソワ一世の命を受け、大西洋横断の航海に出発する。まずニュー・ファンランド島の沿海を探検した彼の一行は、やがてセント・ローレンス湾内のガスペ半島に大十字架を樹て、インディアンの眼前でフランス国王万歳と記した。さらに翌年カルティエはセント・ローレンス河を遡り、豊穡な耕地と眺めのよい山頂に達した。これがケベック州と都市モントリオールの淵源である。以後フランスの植民地カナダはセント・ローレンス河流域を中軸に発展したが、しばしばイロクォア族など原住民の執拗な攻撃に晒された。⁽¹⁾

フランス領カナダは1663年に国王の直轄地となり、やがて西はスペリオル湖、南はメキシコ湾にまで拡大した。十八世紀初頭アメリカに13の植民地を拓いた大英帝国は、宿敵フランスと抗争や戦乱を重ね、1760年ついに首都モントリオールを占領した。こうして七年戦争の結果植民地カナダはフランスから大英帝国に割譲され、同時にフランス語圏と英語圏で相異なる習俗が維持されていく。カトリック信仰とフランス文化の色濃いロアー・カナダでは、大英帝国の統治に対する不満と抵抗がとくに根強く、イギリス風の制度や習俗を好むアパー・カナダとの紛争も繰り返された。ようやく1867年に英領北アメリカ法が制定され、オンタリオ、ケベック、ノヴァスコシア、ニューブランズウィックの4州で構成されたカナダ連邦が誕生する。この際にヴィクトリア女王はフランス語圏ロアー・カナダと英語圏アパー・カナダを融合させるため、両者の接点であるオタワを自治領の首都に定めた。⁽²⁾

十九世紀の末葉オタワ在住の兄弟アンドリュウ・オランドとジョージ・オランドは、都心部を流れるリド-

運河の近くで、科学・技術の革新に応じてひとつの企業を始めた。エルギン通り34番地の営業所で彼らは最新のさまざまな発明や考案、すなわちエディソンの蓄音機、ソーリの蓄電池、スミス・プルミエのタイプライターなどを取引したのである。かねてからオランド兄弟は進取的で意欲的な実業家として注目され、地元の新新聞『デイリー・シチズン』に共同経営者として関与し、バンクーバー=シドニー間の定期運航開設にも力を尽した。映写器械の発明や導入にこうした人物が強い関心を抱いたことは自然と思われる。⁽³⁾

1889年からウェスト・オレンジ研究所では動く映像を覗き眼鏡で見せる装置が開発され、4年後に所長エディソンはその特許を取得した。オハイオの採掘業者ノーマン・C・ラフの肝入りでキネトスコープ社も設立される。これを知ったアンドリュウ・オランドはただちにオタワからニューヨークに赴いて、キネトスコープ社の東部代理人に指名され、キネトスコープ10台を譲り受けた。かくしてエディソンもようやく映画産業に歩を踏み入れ、1894年4月14日カナダの実業家によってブロードウェイ1155番地に世界最初のエディソン・パーラーが開設された。キネトスコープを並べたこの店舗はブロードウェイに興奮を巻き起し、覗き孔で動く画像を眺めるため、押し寄せた観客が長蛇の列をなした。オランド兄弟の尽力についてエディソンは、同年5月1日の書翰で感謝を述べ、業務提携の継続を希望している。まもなくラフもシカゴの摩天楼マゾニック・テンプルでキネトスコープを供覧し、同じ系統のエディソン・パーラーがサン・フランシスコ、パリ、ロンドンなど世界各地に出現した。⁽⁴⁾

投射式の映写機ヴァイタスコープ・エディソンは、1896年4月23日ブロードウェイのコスター・アンド・バイアル劇場で披露され、絶大な反響を呼んだ。カナダの首都オタワでヴァイタスコープの初公開が行われたのは、ニューヨークにおける成功の2ヶ月後である。映写会場に選ばれたウェスト・エンド・パークは、同市の西端に位置し、現在のリッチモンド通り付近にあたる。もともとこの一帯はオランド一家によって開発され、オタワ電気鉄道のターミナルとして遊技場や

ミュージカル・ホールも付設されていた。ヴァイタスコープの興行は7月21日から野外で開始され、1200人のオタワ市民が見まもった。当日は昼間の気温が21度、夕宵8時でもすこし暑かったと伝えられる。この企画を主催したのはエディソンの代理人オランド兄弟にほかならず、司会を務めたのは前座としてマジック・ショーで喝采を浴びた奇術師ベルサズ、本名はジョン・C・グリーンであった。この日に刊行されたオタワの英字新聞『デイリー・シチズン』は、さきに行われた試写会と一般公開の予定についてつぎのとおり報道する。⁽⁵⁾

白布の上のリアリズム

ウエスト・エンド・パークにおける

驚嘆すべきヴァイタスコープの供覧

驚くべき製作、エディソンの最新の発明ヴァイタスコープが、カナダにおける最初の供覧として昨夜ウエスト・エンド・パークで披露された。この不思議な発明によって人生のさまざまな光景と出来事が、あるがままにきわめて躍動的に再現され、投射された映像を昨夕見つめた人々は、そうした画面を楽しんだばかりでなく、活きいきとした動きを神業のごとく白布に描き出す創造的な天才に、無上の感激を覚えた。攻撃にせよ、防御にせよ、ボクサーの動作はきわめて敏速かつ軽快であるが、そうしたプロボクシングの試合における動きのすべてを、ヴァイタスコープによって再現できると知れば、この発明がどれほど感嘆すべきものか、察知できるであろう。〔中略〕

昨夕ウエスト・エンド・パークで行われた試写会において、招待客の間に拡がった喜びは以上のようなものである。ヴァイタスコープの一般公開は今夕から始まり、今週末まで続行される。この驚嘆すべき発明をカナダにおいてはオランド兄弟が管理する。⁽⁶⁾

オタワ電気鉄道の経営者アヒアーンとソーパーもオランド兄弟の企画を支援し、鉄道料金とセットして格安の入場券を販売する。こうしてオタワでもヴァイタスコープの興行が2週間続き、延べ4万5千の観客を魅了する。ウエスト・エンド・パークで供覧されたフィルムは、『西瓜を食べる4人の黒人少年』、『黒ダイヤ特急』、『メイ・アーウィンとジョン・ライスの接吻する光景』などである。因みにカナダ生まれのメイ・アーピンは、ブロードウェイのミュージカル、『未亡人ジョーンズ』に出演し、相手役との長い接吻で評判を取っていた。彼女を主演とする上記のフィルムも、多くの都市で煽情的と非難されたが、スターの採用とクローズ・アップの技法を初めて試み、大衆にもっとも人気のある作品のひとつになった。⁽⁷⁾

カナダにおいてヴァイタスコープ・エディソンが初めて披露された経緯は、以上に述べたとおりである。

この部分に関して筆者はなによりもペーター・モリスの詳細な通史『包囲された映像——カナダ映画史1895-1939』を参考にした。モリスの労作をはじめ従来の研究書は、1896年7月21日オタワでのヴァイタスコープ初公開をカナダにおける映画の起源とみなし、シネマトグラフ・リュミエールの導入は2ヶ月後であると考えていた。⁽⁸⁾しかし、1985年にジェルマン・ラカスは『イストリオグラフ（歴史編纂）——ケベックにおける映画興行の始源』を公刊し、フランス語圏モントリオールでは早くも1896年6月27日シネマトグラフが公開されていると立論した。明白な証左としてラカスが挙げるのは、地元でこの時期に発行されたフランス語の新聞『ラ・プレス』である。⁽⁹⁾そこではまず同月27日の記事で以下のようにシネマトグラフの試写会が予告される。

シネマトグラフ

今夕サン・ローラン街78番地においてリオン在住リュミエールの代理人によりシネマトグラフの試写会が行われる。われらの市長、主要諸機関の長官、卓越した著名人が、報道陣とともにこの夕べに招かれている。⁽¹⁰⁾

ついで同月27日付けの『ラ・プレス』では試写会で披露された映画作品の特徴とともにシネマトグラフ発明の意義がやや詳しく論述される。この記事の執筆者が、シネマトグラフを電信、写真、キネトスコープの発展と評価し、トーキーやカラー映画の実現を確信していることは、とくに注目すべきであろう。

シネマトグラフ

今世紀の驚異のひとつ

活動写真

興味深い試写が土曜の夕べに

リオン在住リュミエールによって発明されたシネマトグラフが、サン・ローラン街78番地で一部の人たちに土曜の夕宵披露された。このように報道しても、重大で興味深い事件への熱狂を十分に伝ええないであろう。活動写真が実現したのである。われらの世紀は電気の実験を解きあかし、幾多の奇蹟と勝利を成し遂げたが、なかでも活動写真こそもっとも驚嘆すべき発明と言える。

最初に電信が可能となり、ついで電話とエディソンのキネトスコープが発明され、いまやシネマトグラフが実現した。止まるところを知らないようである。〔中略〕

最初の題材はリオン＝ペラーシュ駅に到着した列車である。乗客がプラットフォームで待っている。まもなく遠くに列車が現われる。近づくにつれて次第に大きくなる。すぐに間近まで来た。機関車から蒸気と煙が立ち上る。駅に到着して、列車が止まる。ドアが開かれ、停車中の様子が映し出される。降りる人たちもあり、乗る人たちも見ら

れる。みなが急ぎ、押し合っている。そして、彼らの各々をはっきりと識別できる。これほど真に迫った画像はない。本当に駅で見ているようである。列車が発射し、すべてが消え去る。〔中略〕

これらの光景は幻燈を映写するスクリーンに再現された。

器械を操作したミニエおよびピュピエの両氏は、一回の試写で完全なものを達成できるとは思わなかった。ふたりは純然たる科学的な実験を行うつもりであった。たとえば器械の振動が眼を疲労させ、鮮明さを損ない、事物をしばしば夢幻的な茫漠たる印象に止める。とはいえ、こうした軽い欠陥は新しい企てには避けられず、しかも容易に改良できるものであって、今回の成果だけでもまさしく驚嘆に値する。色彩が添えられ、音声を再生する蓄音機さえ加われば、このような映像が完全なものとなる。そうした前進もまもなく達成される、と私たちは信じた。〔11〕

こうして1896年6月27日にケベック州モントリオールのサン・ローラン街78番地、カフェ＝コンセル・パラスにおいて招待客にシネマトグラフが披露された。イギリス語圏オタワにヴァイタスコープが導入される24日前である。モントリオールでの試写会はふたりのフランス人映写技師、ルイ・ミニエとルイ・ピュピエによって進められ、会場のカフェ＝コンセル・パラスは、カナダのカルティエ・ラタンと称される地域にあった。パラスで上映されたリュミエール映画の美事さがここでも評判となり、ミニエとピュピエはさらに数週間同市に滞在し、ケベック州の各地でシネマトグラフの興行を試みた。〔12〕

この部分の論述は主としてイーヴ・ルヴェの大著『ケベック映画全史』に依據するが、同書によってもフランス人ミニエとピュピエがどのような経緯でモントリオールに来たかは不詳である。また、ジャック・リト＝ユティネは労作『始源の映画—リュミエール兄弟とその映写技師たち』の巻末で、シネマトグラフの興行に関与した86人の経歴と活動を列記しているが、ミニエとピュピエに関する説明は見当らない。

なお、モントリオールにおいてもシネマトグラフの公開が英字新聞では一切報道されなかった。ルヴェの推論によれば、英語圏の研究者がカフェ＝コンセル・パラスでの試写会について無知であった一因は、カナダ特有の言語的な問題に存する。

シネマトグラフ・リュミエールとヴァイタスコープ・エディソンが相次いで伝来した1896年、カナダ連邦の政治と経済は新たな転機に入りつつあった。18年間政権の座にあった保守党が同年6月の総選挙で敗北し、自由党の有能な政治家ローリエが首相に選出される。以後カナダでは西部の開拓と資源の開発が本格的となり、とりわけ小麦の増産によって世界市場にも確

乎たる地歩を獲得した。〔13〕のちにカナダ全国博覧会に発展する産業博覧会が、オンタリオ州トロントで催されたのもその秋である。

産業博覧会が開幕した1896年8月31日、都心部ヤング通り81番地のロビンソン・ミュージズでヴァイタスコープが公開された。この演芸ホールでは巡業奇術師エドフォートンが『メイ・アーウィンとジョン・ライスの接吻する光景』などの作品を披露し、観客の熱烈な喝采に応じてつぎの数週間続行した。ついで9月1日から産業博覧会の特別企画としてシネマトグラフの供覧が開始される。これを企画したH・J・ヒルは産業博覧会の主催者であり、リュミエール社の映写技師メスギッシュの諒解を取っていた。シネマトグラフの迫真性は地元の新報『テレグラム』9月8日号で称賛され、博覧会の終了後もヒルは10月23日からロビンソン・ミュージズの向い側ヤング通り96-98番地で興行を再開した。ここでは毎日午前10時から午後10時まで映写が続けられ、25セントの料金で40分ずつ観覧させた。〔14〕

この産業博覧会にはレントゲンのX線やロバート・ポールのアニメトグラフも展示される。また、同年の歳末までヤング通りでシネマトグラフを供覧したヒルは、ひき続きオンタリオ州の各地をも巡業した。〔15〕なお、ディングレイ法の適用によってアメリカでの興行が妨げられたため、メスギッシュは1897年に一時カナダへ避難した。〔16〕同国でのシネマトグラフ巡業と途上におけるナイアガラ瀑布撮影について、彼は以下のとおり記述する。

このような状況で身動きできないため、私はニューヨークの弁護士ルビヤールとカナダへ出発することを決意した。モントリオール、ケベック、オタワ、そしてトロントで巡業し、どこでも成功を博した。

ホワイト・マウンテンを通過してニューヨークに帰る途中、ナイアガラ瀑布に立ち寄る機会を得た。

大きな渦巻を描いて降下する水流。豪雨のようにしぶきを挙げて、物凄い速さで深淵へ落下する大河であり、見詰めようにも目眩いを起すばかり。なすすべもない。拡がった巨大な白布。水流の怖るべき突進が果てしなく続く光景であった。

ナイアガラ瀑布をさまざまな角度で撮せるよう、あちこちの斜面で私の足場を探した。馬蹄形の滝、フォース・シューの壮観を捉えるために、私はついに断崖にまで登った。映写レンズを覗くと、危険を忘れた。撮影したのは霧のなかに描かれた半円形の虹、そしてしぶきを煌めかせつつ、空中を滑る巨大な白布である。ながくクランクを回した私は、軽率にも真下の激流を見た。目眩いと恐怖が私に襲いかかり、やっとそこから離れた。〔17〕

同年11月モンリオールに現われたグランセーニュ・ドートリーヴ子爵とトレウレ・ド・ケルストラ伯爵夫人は、この時期から輩出する巡回興行師のなかでとくに注目すべき存在である。これらふたりのフランス人は己れの映写機をイストリオグラフ(歴史編纂)と呼び、学校で世界史教育を教えるの役立つと推奨した。彼らは有力者や教会筋へ巧みに取り入り、ケベック州の辺鄙な村落までも巡業し、リュミエールやメリエスやパテの作品を見せたと言われる。⁽¹⁸⁾

1896年メキシコに派遣された映写技師ガブリエル・ヴェールは翌年ふたたびリュミエール社の命を受け、ロンドン、リバプールを経由してモンリオールに赴いた。彼の作品『インディアンのダンス』は、同年の9月頃この地で原住民の姿を捉えたものである。アメリカとの国境近くで撮影されたメスギッシュの『ナイアガラ』を別格とすれば、現存するリュミエール映画のなかでカナダで撮影されたものはこのフィルムのみである。しかし、ヴェールはモンリオールにながく滞在せず、10月10日日本に向けて旅立った。⁽¹⁹⁾

1896年の春シネマトグラフに驚嘆したエルスト・キメは、映写技師として数年間各地を巡回したあと、1906年1月モンリオールのサント・カテリーヌ街に映画館キメトスコープを開設した。その年の聖週間にキメはパテ社製作『キリストの生涯と受難』を上映し、評判と収入の両面で大当りを取る。まもなくモンリオールに同じような映画館がいくつか出現し、合衆国やヨーロッパ諸国とほぼ同じ時期にカナダでも常設館による映画興行が本格化した。翌年9月開場した第二のキメトスコープは、客席1200の大劇場であり、北米における最初の豪華な映画館と言われる。1908年からキメは自身で周囲の生活や出来事を撮影し、子どもを記録した『わが希望』や『ケベックその300年祭』などを製作した。カナダで初めてフィルム市場を開設し、パテ社の北米総代理人となったのも彼である。こうした製作や興行は伝統的な社会規範に囚われず、しばしば司法当局とカトリック教会の忌諱に触れる。映画企業におけるキメの活動は30年の長きにわたり、トーキーの開発や立体映像の実験にまで及んだ。⁽²⁰⁾

カナダにおける最初の劇映画は、ロングフェローの叙事詩を脚色した『ハイアウォサ』である。この作品はローゼンタールのもとで1903年に製作され、オンタリオ州を背景に原住民オジブワ族の英雄が描かれている。なお、ケベック州における製作はかなり遅れ、フランス圏の本格的長編と自負できるのは、1922年完成の『マドレーヌ・ド・ヴェルシェール』を嚆矢とする。この映画はインディアンと戦った白人女性マドレーヌを讃美し、行政当局の推奨するところとなった。こうした政治的な思惑や宗教的な抑制によって、カナダにおける映画製作は以後ながく制約され、映画作品の内容も平板で魅力に乏しいものが多くなる。⁽²¹⁾

II メキシコにおけるリュミエール映画の受容

1810年中部高原の寒村ドロレスで、ひとりの篤実な神父が圧政打倒の宣言を発した。メキシコ独立の祖と仰がれるミゲル・イダルゴである。囚人を解放し、役人を牢に繋いだ神父を、ただちに10万余の民衆が支援し、インディオとも連帯してグアナフアトなど諸都市を占拠する。この事件を端初としてスペインへの闘争が燃え上がり、1821年コルドバ条約の締結が300年にわたる植民地支配を崩壊させた。⁽²²⁾

独立後もメキシコは指導者層の葛藤やアメリカとの戦争で揺れ、1863年にはナポレオン三世の意を受けたフランス軍がメキシコシティに侵攻した。フランスに擁立された皇帝マクシミリアーノは3年後孤立して処刑され、代って英明な政治家ペニート・ファレスが大統領として平和の維持と産業の開発に努めた。フランス軍撃退の功労者ディアスが、ファレスの歿後大統領に選出され、教会勢力の抱込みや治安警察の強化によって独裁的な政権をながく維持する。1877年から1911年に至るディアス時代には、資本主義発展を促進する大土地所有者が形成され、外国資本の導入や鉄道輸送網の建設も推進された。また、大統領の近代化政策を補強するため、いわゆる科学主義者たちが側近となり、実証主義への讃美、科学の進歩への期待、物質的な繁栄の重視、白人優位の文明観などを唱導した。⁽²³⁾

エディソンのもとで製作されたキネトスコープは、1895年1月17日にメキシコシティで、また同年5月30日グアダハラで初めて公開された。この際には単純な動きを覗き眼鏡で見るに止まり、映写機も頻繁に故障したため、評判を博するまでに至らなかった。⁽²⁴⁾この年才能豊かな文学者アマード・ネルヴォが最初の小説『エル・バキエラ』を発表し、聖職者の愛欲をめぐる騒然たる論議を巻き起した。⁽²⁴⁾

一級薬剤師の資格をもつガブリエル・ヴェールが、中米におけるシネマトグラフ巡業のため、ル・アール発のガスコーニュ号に乗船したのは、1896年7月11日である。25歳の映写技師ヴェールはニューヨークで列車に乗換え、東シエラマドレ山脈の高原都市メキシコシティに着いた。以後彼はリヨン近郊で暮す母親に、現存するだけでも60通の書翰を送る。首都で彼はただちにリュミエール社代理人フェルナンド・ボン・ベルナルと会い、さらに同国の権力筋や有力者に紹介された。8月6日大統領ディアスはヴェールらをメキシコシティ西部の壮麗な官邸チャブルテペック城に招き、家族や側近約40人とともにリュミエール映画を視覧する。この年ディアスは4期目の大統領に選出されていた。⁽²⁵⁾

メキシコにおける最初のシネマトグラフ一般公開は、1896年8月15日プラテロス街9番地(現在のマデーロ街)ドロゲリア・プラテロスの中二階で行なわれた。

この街路には植民地時代の建造物が多く、近くに屹立する国立宮殿の敷地には、十六世紀までアステカ皇帝の居城があった。母親に宛てたヴェール自身の書翰は、シネマトグラフ初公開に対するメキシコ人の反響やドロゲリア・プラテロスにおける興行の状況を生きいきと伝えている。⁽²⁶⁾

とうとうその日が来ました！昨日、8月15日から一般公開が始まりました。一昨日にプレス用の試写を行ったところ、招待客が千五百人も来てしまい、会場に入りきれないほどでした。上映は拍手喝采を浴びました。一般公開も大成功間違いなしでしょう。みんなが「ムイ・ポニート」と叫んでいました。これは「すばらしい」という意味です。特に女たち（ラスム・ヘール）と子供たち（ムチャチョス）は狂喜乱舞の状態です。こういう言い方はジャゼフみたいですね。とにかく最高のすべりだしと言えるでしょう。

昨日の一般公開初日は雨に見舞われましたが、それでもたくさんの方が来ました。

今日は会場が溢れると思います。朝から大勢の人が集まってきています。けれど上映は夕方五時からです。それまでは電気が使えませんから。電気については、本当に悩まされました。前に書いたように、もともと会場を見つけるのは大変でした。ようやくサロンの二階を二ヶ月借りることができるようになったのですが、その翌日に競争相手がやってきて、我々の会場の隣を借りるというのです。とにかく先きを越されては大変と、大急ぎで準備を始めました。あとは電気だけというところまで来て、電力会社に行ってみると、流れている電流が違うことがわかったのです。〔中略〕

夜の八時になると店がすべて閉まり、みんな寝てしまいます。三十万人もの人々が住んでいるのに、劇場が二つあるだけで、あとはなにも楽しみはありません。そのうえ芝居は夕方四時に始まり、八時半にはもう終わりです！ここはほかに娯楽がないので、映画上映は大成功を取めるに違いありません。⁽²⁷⁾

ドロゲリア・プラテロスに張り出された同月27日付けプログラムによれば、1ペソの入場料で午後4時半から9時半まで開かれ、この日の上映作品は『踊る帽子』、『子どもの喧嘩』、『ロシアの山』、『モスクワにおける皇帝』、『写真師』、『イワシ釣り』、『金魚鉢』、『列車の到着』等であった。これらの作品に接したルイ・G・ウルビーナは、メキシコ最初の映画批評をつぎのように書いている。⁽²⁸⁾

映画がメキシコで流行になった。映画の出現が首都を興奮させている。首都と言っても、プラテロス街の酒亭ピーター・ゲイからサン・フランシスコ街のエスカンドン館という限られた範囲であ

るが…。新しい奇妙な器械がここではキネトスコープに勝利した。〔中略〕

競合するほかの器械と同じく、これも生の再現によって私たちを楽しませようとする。だが、欠けているものがある。色彩が欠けている。音声が付加されるのは時間の問題であろう。〔中略〕スペンサーによってシンデレラと呼ばれたものの、科学はながく誤用されてきたが、ファンタジーを愛する人々からいまや感謝を捧げられる。⁽²⁹⁾

プラテロス街における初公開の数日後、ヴェールとベルナルはふたたびチャプルテペック城に招かれ、メキシコで撮影した作品5本を大統領に披露した。すなわち、①連れ立って出掛けるディアズ將軍とその家族、②パーヌ遊泳場の情景、③士官学校の光景、④ヴィガ運河の情景、⑤チャプルテペック城を散歩するディアズ將軍。これらのフィルムは首都に到着した直後、メキシコ軍司令官等の許可を得て、迅速に製作されたものである。ヴェールはヨーロッパ風の上流階級にも招待され、ある將軍の邸宅ではマンドリンを弾く3人の令嬢に惹きつけられた。とくにそのひとり気品と優雅さで輝き、メキシコ最高の美女と噂されていた。⁽³⁰⁾

独立記念日にあたる9月16日、メキシコシティではイダルゴ神父の宣言を偲んで、大統領官邸でゆかりの鐘が打ち鳴され、盛大な式典が挙行される。この日ヴェールは市内の目抜き通りに足場を作り、同国最大の式典を撮影した。ここで記録された『独立の鐘の輸送』には、メキシコ軍騎兵隊に護られて式場に運ばれる記念の鐘、そして独立を慶賀し、沿道で鐘の移送を見送る数千の無数の群衆が収められている。⁽³¹⁾なお、ヴェールに関する近年の研究によれば、反逆した兵士の銃殺やピストルで決闘する場面をメキシコ滞在の際フィルムに収めたが、国民の憤激と抗議によってそれらの上映は禁止になった。⁽³²⁾

さらにヴェールは第二の都市グアダハラに赴き、同年12月29日までシネマトグラフの興行を続けた。その地ではすでに投射式のヴァイタスコープ・エディソンが9月27日に公開されていた。1897年1月9日彼はメキシコシティで最後の上映を行い、翌日キューバの首都ハバナに旅立った。⁽³³⁾

1897年に工業技術の学生サルバトール・トスカーノは、リュミエール兄弟から撮影機・映写機を購入し、ジェズマリア街17番地でシネマ・サロンを始めた。ここではエディソンの蓄音機を併用して、リュミエール映画に音声を添えた。1898年にトスカーノは人気俳優パロ・ガヴィラネスを起用して、メキシコ最初の劇映画『ドン・ジュアン・テノリオ』を製作した。1911年新しい時代を拓くメキシコ革命が火蓋を切るや、トスカーノは転変する事件と状況を広汎に撮影し、第二次大戦後その娘カルメン・トスカーノの手で長編映画

『あるメキシコ人の記録』として編纂される。⁽³⁴⁾

III キューバにおけるリュミエール映画の受容

カリブ海域のキューバでは十九世紀の後半に至るまでスペインの植民地支配が続いていた。しかし、砂糖の生産を経済の根幹とするキューバは、大農場の改善や外国との輸出競争に際して宗主国の無能を痛感し始める。1868年納税拒否に端を発した反抗が、カマグエイやオリエンテなど東部各地での蜂起へと発展し、翌年には共和国の樹立、奴隷制の廃止、アメリカとの連帯が宣言された。この第一次独立戦争は10年間続き、人口70万の植民地にイベリア半島から10万の軍隊が投入される。1878年スペインとの間で休戦協定が成立し、植民地キューバの自治権と奴隷制の廃止が認められた。⁽³⁵⁾

1895年4月キューバ革命党の創立者ジョゼ・マルティが、密かにフロリダからオリエンテ海岸に上陸し、第二次独立戦争の火蓋が切られた。スペイン・ロマン派の文学者ベッケルの影響を受けたマルティは、祖国への愛を歌った格調高い詩集を刊行し、メキシコ、グアテマラ、ヴェネズエラ、アメリカで15年間の亡命生活を過した。この間つねにキューバの解放運動を指導した彼は、帰国した1ヵ月後スペイン軍との闘いで戦死する。マルティを失った反乱軍はふたりの将軍マクシモ・ゴメズとアントニオ・マセオに率いられ、同年11月東部の町ジマグアユで革命政権が樹立された。まもなくこれらの将軍は首都ハバナの位置するキューバ西部に進軍し、植民地経営のため造られた無数の施設や農場を破壊した。しかし、スペインからは勇猛な将軍ヴァレリアノ・ヴェイレルが急派され、革命軍に対して徹底的な反撃を行った。こうして1896年末にはヴェイレルが多くの方で革命軍を敗走させ、副司令官マセオをハバナ近郊で殺害した。⁽³⁶⁾

シネマトグラフを携えてヴェールがキューバに来たとき、カリブ海域はこのような動乱と激戦の渦中にあった。当地におけるシネマトグラフ初公開は、1897年1月24日ハバナの旧市街パセオ・デル・プラド（現在のパセオ・デル・マルティ）の一角で行なわれる。会場の隣に位置する有名なタコン劇場は、サラ・ベルナル、アンナ・パヴロヴァ、エンリケ・カルーソなどの公演が絶讃を博したところである。初日に『列車の到着』や『水を撒かれた庭師』など早い時期のリュミエール映画が披露され、数日後これらに加えてメキシコで収録した『グアダルプにおける農夫の荷積み』と『チャプルテペックにおける決闘』が上映された。まもなく彼はキューバ史上最初の映画『消防演習』を撮影する。なお、入国の条件としてヴェールは、大砲の射撃や連隊の行進などを撮影し、スペイン軍の偉容を示すよう行政当局から要求された。しかし、この際に彼が製作したフィルムはキューバにもフランスにも

保存されていない。慌ただしくハバナを離れたヴェールは、さらにコロンビアとヴェネズエラで旅の苦難に晒されたあと、1897年12月に故郷リヨンへ帰った。⁽³⁷⁾

シネマトグラフ初公開から僅か20日経った2月13日、ヴァイタスコープ・エディソンがハバナで披露される。これと拮抗するディクソン製作バイオグラフもまもなく導入される。リュミエール映画に感嘆した俳優ジョゼ・E・カザスは、1898年にメリエスの手法を真似て『消えていく魔法使』を撮影した。こうしてカザスはキューバにおける最初の映写技師となり、やがてパテ社の映写機を購入して各地での巡業を始める。⁽³⁸⁾

1897年3月アメリカ大統領に就任したマッキンレーは、中立主義の伝統を離れず、キューバ内戦への介入には当初慎重な態度をみせた。しかし、1898年2月15日米国海軍の巡洋艦メーヌ号がハバナ港で爆破され、乗組員260人が死亡する。4月19日マッキンレーの教書を受けてアメリカ議会は、キューバ解放のためスペインと戦うことを決議した。こうして勃発した米西戦争は米国海軍のサンティアゴ・デ・クーバ占領で終結し、12月10日パリで締結された平和条約によってキューバの独立とスペイン軍の撤退が定められた。⁽³⁹⁾

メーヌ号の爆破と米西戦争の推移はアメリカのマスコミによって大々的に報道された。ハースト系の新聞『モーニング・ジャーナル』は、「メーヌ号を忘れるな!」と訴えて、連日8頁以上をこの事件に当てる。『ワールド』の経営者ピュリッツァーも特派員を現地に送り、爆破の現場をキューバ人ジョゼ・G・ゴンザレスに撮影させた。ふたりの映写技師アルベール・E・スミスとJ・ステュアート・ブラクトンも、海軍次官テオドール・ルーズベルトの意向を受けてキューバへ赴き、サン・ジュアン丘への突撃を撮影した。これらの映像はほとんどセットを組んで造られたものの、真実の生々しい記録と宣伝され、アメリカ国民の敵愾心を著しく高揚させた。⁽⁴⁰⁾ スミスの回顧録『ふたつのリールとひとつのクランク』には、映画の虚構性やその政治的利用について以下のような記述が見出される。

スクリーンに現われたものを見て、私たち自身が興奮しなかった、と言えば嘘になる。〈小銃〉から発する黒煙と火花が、その場面に迫真の雰囲気を与えていた。撮影した日のカメラとレンズが精巧でなかったため、模型の粗雑さも隠されたし、2分間しか続かない映像を、綿密に検討する余裕はだれにもなかった。その時点では欺瞞であるが、これこそ最初の撮影模型にほかならず、現代の映画製作における高度の〈特殊効果技術〉に先鞭をつけたものである。パスター館とふたつのプロクトー館は数週間観客で満席になった。そして、『サンティアゴ湾におけう戦闘』や30分の長編『われ

らの息子とともにキューバで戦いて』が興奮と熱狂を巻き起すのを見て、ブラックトンと私の良心も次第に痛まなくなった。ニューヨークでほとんどすべての新聞がこれらの映像を解説し、ふたつの歴史的な事件を現場で収録したヴァイタグラフの偉業を褒め讃えた。⁽⁴¹⁾

IV グアテマラにおけるリュミエール映画の受容

グアテマラはインディオによるマヤ文明で知られるが、活発な火山活動から富士山型の高峰や森林に囲まれた湖も造られている。この美しい風土に暮す原住民が、十五世紀の前半凶暴なスペイン軍に征服され、メキシコを中核とする植民地ニュースペインに併合されていた。1821年ヨーロッパにおける政変を転機にメキシコの独立が承認されると、グアテマラはエルサルバドル、ホンジュラス、コスタリカとともに中央アメリカ連合を形成した。しかし、これらの地域では軍部を主体として複雑な権力闘争が繰り返され、1838年からグアテマラは単独の国家として独自の道を進み始める。1871年政権に就いた自由派のフスト・ルフィノ・バリオスは、教会領の没収と学校の非宗教家化を命じ、道路・鉄道の建設や輸出用のコーヒー生産を促進した。この時点でもインディオは人口の大部分を占め、ほとんどが農村部に居住していた。中米5地域の再統合を主張するバリオスは、やがてエルサルバドルに侵攻し、みずから前線で戦死する。その後1894年にもグアテマラの政府はメキシコの南部国境に軍隊を出動させ、まもなく撃退された。翌年モスキート海岸に関する紛争でイギリス軍艦がニカラグアガのコリント港を封鎖すると、エルサルバドル、ホンジュラス、コスタリカが中央アメリカ共和国を結成する動きを見せた。イギリスとの紛争に関してニカラグアガを擁護したアメリカは、中米諸国の共和国結成には冷たい反応を示し、ヨーロッパ列強に代わって中南米への支配力を増していく。⁽⁴²⁾

この国で初めてシネマトグラフが披露されたのは、1896年9月26日グアテマラシティにおいてある。1776年総監所在地であったアンティグワが大地震で壊滅し、以後海拔1493メートルのグアテマラシティに首都が移された。住民の大半をマヤ系の原住民が占めるこの都市も、1876年には大地震に見舞われる。首都のアイシネナ小路で試写されたリュミエール映画について、当地の新聞『中央アメリカ・ジャーナル』はつぎのような論評を記載している。⁽⁴³⁾

昨日アーノルド・トブラー氏の招待を受けて幸いにも私たちは、アイシネナ小路11番地できわめて精巧な発明が供覧されるのに立ちあつた。この発明はシネマトグラフと呼ばれ、リヨンの有名な写真家によって完成されたものである。

この種の器械としては一番興味深いものを見せ

てくれる。細部でも全体でも完璧に精密な画像を、観客は楽に眺めることができる。映写する一室が初めは電燈で照明され、明かりが消される。そのとき会場の奥に画像が浮き出て、現実生活の忠実な反映が現われる。

リュミエールの動く画像は、十分に満足できるもので、一見に値する。アイシネナ小路11番地における上映を見逃さず、シネマトグラフに感嘆し、喝采されるよう、私たちは読者に勧めたい。⁽⁴⁴⁾

同年の10月26日カルロス・ヴァレンティの手によってコンロン劇場でヴァイタスコープ・エディソンも公開される。他方シネマトグラフの興行は地方へ拡がり、12月4日には西部の町ケザルテナンゴで著名な道化役者クコとクキトの映像が上映された。1912年にアルベルト・デ・ラ・リーバがグアテマラで初めて映画を撮影する。その3年後パテ社のカメラを携えて、アドルフ・ヘルブルゲルがやって来た。彼はグアテマラの有名な俳優ギレルモ・アンドレウとエスぺアンザ・ロボスと交渉し、ふたりを主演とする作品『パトロンの息子』を製作した。しかし、1917年グアテマラ・シティはふたたび大地震に襲われ、すべて初期のフィルムは焼失した。すでにその頃首都ではヴァリエグドス・シアター、アプリル・シネマ館、エクセルシオール・サロンなどが人気を集めたものの、これら本格的な映画館も不慮の災害によって粉微塵に破壊された。⁽⁴⁵⁾

【註】

筆者が参照した主要な書物は、本稿において下記の略号で示される。(略号の大文字は著者名の頭文字を、小文字は書名の頭文字を示す。)

- Ccu : Michael CHANAN, *The Cuban Image, Cinema and Cultural Politics in Cuba*, London, British Film Institute, 1985.
- Fdc : Douglas FETHERLING, *Documents in Canadian Film*, Peterborough, Browdview Press, 1988.
- Gca : Sylvain GAREL et al., *Les Cinémas du Canada*, Paris, Centre Georges Pompidou, 1992.
- Hcl : Guy HENNEBELLE et al., *Les Cinémas de l'Amérique latine*, Paris, Lherminier, 1981.
- Lhq : Yves LEVER, *Histoire générale du cinéma au Québec*, Montréal, Les Editions du Boréal, 1988.
- Me : Peter MORRIS, *Embattled Shadows, A History of Canadian Cinema 1895-1939*, Montreal, McGill-Queen's University Press, 1992.
- Mm : Carl J. MORA, *Mexican Cinema, Reflections of a Society 1896-1988*, Berkeley, University of California Press, 1989.
- Mt : Felix MESGUICH, *Tours de manivelle, Souvenirs d'un chasseur d'images*, Paris, Grasset, 1933.
- Pcm : Paulo Antonio PARANAGUA et al., *Le Cinéma mexicain*, Paris, Centre Georges Pompidou, 1992.
- Rc : Jacques RITTAUD-HUTINET, *Le Cinéma des origines, les frères Lumière et leurs opérateurs*, Seys-

- sel, Champ Vallon, 1985.
- Rm : Terry RAMSAYE, *A Million and One Nights, A History of the Motion Picture*, New York, Simon and Schuster, 1926.
- Shg : Georges SADOUL, *Histoire générale du cinéma*, Paris, Denöi, 1973. 6 volumes.
- サセ : ジョルジュ・サドゥール著, 村山匡一郎ほか訳『世界映画全史』国書刊行会, 1993年—1995年。(第5巻まで刊行)
- ハリ : 蓮見重彦編『リュミエール元年——ガブリエル・ヴェールと映画の歴史』筑摩書房, 1995年。
- ヨエ : 吉田喜重, 山口昌男, 木下直之著『映画伝来——シネマトグラフと〈明治の日本〉』岩波書店, 1995年。
- (1) J. M. S. ケアレス著, 清水博, 大原祐子訳『カナダの歴史——大陸・民族・国家——』山川出版社, pp.19-22, 36-38, 49-51, 58-59.
カルチエ「航海の記録」カルチエ, テヴェ『フランスとアメリカ大陸II』岩波書店, 1982年。pp. 41-43, 83-87.
H. H. HERSTEIN, L. J. HUGHES, R. C. KIRBYSON, *Challenge & Survival, The History of Canada*, Ontario, Prentice-Hall of Canada, 1970. pp. 13-15, 20-27.
- (2) ケアレス, 前掲書。pp. 100-103, 123-125.
- (3) *Me*, pp. 3-5.
- (4) *Rm*, pp. 87-90. *Me*, pp. 5-6.
- (5) *Me*, pp. 1-3.
- (6) *Daily Citizen*, July 21, 1896, p. 7. dans *Me*, pp. 1-2.
- (7) *Me*, pp. 2-3. *Shg*, tome I, pp. 266-267. (サセ, 第2巻。pp. 68-69.)
- (8) *Me*, pp. 10-11.
- (9) Germain LACASSE, *L'Historiographe (Les débuts du spectacle cinématographique au Québec)*, *La Cinématique québécoise*, 1985.
Pierre VERRONNEAU, La Presence du film français au Québec au temps du muet. dans *Le Cinéma français muet dans le monde, influences réciproques*, Toulouse, Institut Jean Vigo, 1989. pp. 148-149.
- (10) *La Presse*, le 27 juin 1896. dans *Fdc*, p. 7.
- (11) *La Presse*, le 29 juin 1896. dans *Fdc*, p. 7-9. 映画史家のサドゥールやデラントが推論したとおり, ブロードウェイにおけるシネマトグラフ公開の初日を1896年6月28日とすれば, モントリオール=サン・ローラン街での試写会はそれに一日先立つことになる。(本稿〈その3〉を参照のこと)
- (12) *Lhq*, p. 27. cf. *Rc*. pp. 228-239.
- (13) J. M. S. ケアレス著, 前掲, pp. 316-324.
HERSTEIN, HUGHES, KIRBYSON, *op. cit.*, pp. 285-287, 292-298.
- (14) *Me*, pp. 7-9.
- (15) *Me*, pp. 8-10. *Mt*, pp. 13-16.
- (16) *Mt*, pp. 15-16.
- (17) *Mt*, pp. 16-17.
- (18) *Lhq*, p. 28. VERRONNEAU, *op. cit.*, p. 149.
- (19) 古賀太構成・訳「ガブリエル・ヴェールの手紙——最初のインディペンデント映画作家の世界旅行」(ハリ。pp. 71-72.)
- (20) *Lhq*, pp. 29-31, 33-34, 44-46. *Me*, pp. 23-25, 38-39.
第二次大戦後にキマーは, 1896年春にシネマトグラフを見たとの証言を述べている。しかし, 60年後に語られた長老の回想は, 信憑性に乏しいと研究者の間で従来退けられてきた。(*Me*, p. 278.)
- (21) *Me*, p. 36. *Lhq*, p. 43.
- (22) Michael C. MEYER, *The Course of Mexican History*, Oxford, Oxford University Press, 1983. pp. 285-291.
メキシコ大学院大学編, 村江四郎訳『メキシコの歴史』新潮社, 1978年。pp. 111-115.
- (23) 国本伊代, 畑恵子, 細野昭雄著『概説メキシコ史』有斐閣, 1984年。pp. 71-73, 78-93.
- (24) *Mm*, p. 5-6. *Pcm*, p. 25. MEYER, *op. cit.*, p. 476.
- (25) Philippe JACQUIER, Un opérateur de la Maison Lumière, Gabriel Veyre. dans *Le cinéma français muet dans le monde, influences réciproques*. p. 58.
Pcm, p. 93. *Rc*, p. 125. 古賀太, 前掲。(ハリ。pp. 47-49, 57, 62.)
- (26) *Pcm*, p. 71. *Rc*, pp. 125, 128.
- (27) Gabriel VEYRE, Lettre à sa mère du 16 août 1896. 古賀太の訳文による。(ハリ。pp. 58-59, 62.)
- (28) *Pcm*, p. 71. *Mm*, p. 6.
- (29) *Mm*, p. 6.
- (30) *Pcm*, p. 71. *Rc*, p. 128.
- (31) *Pcm*, p. 71. 古賀太, 前掲。(ハリ。pp. 57-58, 62.)
- (32) 吉田喜重「〈天国, しかも曖昧なる——〉日本」(ヨエ。pp. 90-92.)
因みに吉田喜重はこの事件によるヴェール自身の戦慄に注目し, シネマトグラフから離れた晩年を洞察する。同氏の推論によれば, 銃殺や決闘の記録をととしてヴェールが痛感したのは, 映像のもつ非情なアクチュアリティであり, やがて全体主義や軍国主義に利用される映画自体の病弊を彼はつとに予感していた。映像ドキュメンタリー『夢のシネマ, 東京の夢』(監督: 吉田喜重, 製作: 現代映画社=セビア・プロダクション=東京メトロポリタンテレビジョン, 1995年。)では, こうしたヴェールの足跡と心境が一層感銘深く描かれている。
- (34) *Mm*, p. 7.
- (35) *Pcm*, pp. 25, 71.
- (36) Leslie BETHELL, *The Cambridge History of Latin America*, Cambridge, Cambridge University Press, 1986. volume V, pp. 229-235.
- (37) Leslie BETHELL, *op. cit.*, pp. 236-240.
E. ウィリアムズ著, 川北稔訳『コロンブスからカストロまで——カリブ海域史, 1492—1969』岩波書店, 1978年。第2巻。pp. 167-168, 183.
- (38) Hector GARCIA MESA, Incidence du cinéma Français muet à Cuba. dans *Fcm*, p. 157-158.
Julianne BURTON, dans *Hcl*, p. 259.
JACQUIER, *op. cit.*, pp. 58-59. *Ccu*, p. 29.
- (39) MESA, *op. cit.*, p. 153.
- (40) Leslie BETHELL, *op. cit.*, pp. 241-244.
I. ヒューバーマン, P. H. スウィージー著, 池上幹徳訳『キューバ——一つの革命の解剖』岩波書店, 1960年。pp. 21-26.
- (41) Louis A. PEREZ, *Cuba between Empires 1878-1902*, Pittsburgh, University of Pittsburgh Press, 1982. pp. 43-56, 172-178, 200-210.
Ccu, pp. 22, 24-26. BURTON, *op. cit.*, pp. 159-160.
なお, このルポルターージュはメリエスによってフランスで再現され, 海底に沈んだ軍艦とまわりを泳ぐ魚の映像が製作された。(*Ccu*, p. 26.)
- (42) Albert E. SMITH, *Two Reels and a Crank*. pp.67-68.

- (42) BETHELL, *op. cit.*, pp. volume V, pp. 205-207, 220-223.
(43) ARtero ARIAS, Leonor HURTADO, José CAMPANG, Guatemala. dans *Hcl*, pp. 323-324.
(44) *Diario de Centro America*, le 27 septembre 1896. cité

- dans ARIAS, HURTADO, CAMPANG, *op.cit.*, p. 324
(45) ARIAS, HURTADO, CAMPANG, *op. cit.*, pp. 324-325.
(平成8年9月10日受理)